



Title	<学界消息>最近の西ドイツのソ連・東欧研究の一側面
Author(s)	中山, 弘正; Nakayama, Hiromasa
Citation	スラヴ研究, 31, 155-165
Issue Date	1984
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5142
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113232.pdf



最近の西ドイツのソ連・東欧研究の一側面

中山 弘 正

1982年9月のちょうど1と月間、西ドイツを訪れ、ウィーンに抜けて帰国した。この間ソ連・東欧関係の6研究所を訪問したので報告しておきたい。資料や研究者のことを書き留めていくが、特別に私個人の関心の深いテーマに傾いたノートとなっていることをお許しいただきたい。

先ず西ドイツのソ連・東欧研究に関してはスラブ研究センターで教えていただいたが少くとも次のような日本人の手になる文献がある。

- (1) 五十嵐清「ドイツにおける Ostrechtsforschung の発展と現状」『スラブ研究』No. 15, 1971.
- (2) 鳥山成人「古ロシア史の国際会議に参加して」『スラブ研究』No. 16, 1972. 1971年5月の西ベルリン市内でのベルリン自由大学 F 教授主催の会議の報告。
- (3) 野尻武敏「西欧の東欧経済研究——西ドイツとオーストリア——」『神戸大学経済学研究年報』23, 1977. 1975年秋、オーストリアから東西ドイツを訪ねられたときの報告。ウィーン、ミュンヘン、ベルリンなどの8研究所の報告を中心としているが、西ドイツの東欧研究機関の一覧表などが詳しい附表にある。
- (4) 小島修一「西独の東欧研究覚え書」『甲南経済学論集』第19巻第4号, 1979. 1978年5～8月のケルン、ギーゼンなどの研究所の報告。

また西ドイツ人自身による東欧研究史の最近の概観として次のものがある。

- (5) Arnold Buchholz. Methodische Probleme der Sowjetunion und Osteuropaforschung. "Aus Politik und Zeit Geschichte" '81-11. 28.
- (6) Arnold Buchholz. Osteuropaforschung in der Bundesrepublik Deutschland. "Internationale Osteuropaforschung"

(5), (6) によれば、20世紀初頭にはベルリン大学に「東欧史、地誌学セミナー」が開設され、1913年には「ロシア研究のドイツ学会」が組織されている。1920年代はとくに盛んな研究があり、1925年 Osteuropa 誌が創刊された(1939年まで)。1930年、南東欧研、ミュンヘン研など設立、ただしナチ化で研究は衰え、戦後1949年東欧学会再建、53年7研究所の統合などで基礎ができた。1958年外務省に Ost-West-Arbeitskreis が出来、61年ケルンの研究所となる。1960年代後半には、ネオマルクス主義的潮流も含め大学などでソ連・東欧研究に新傾向がでた。70年代に入り、一般史は大学に、テーマ別専門研究所は連邦と接近するという再編成が行なわれた。近年、大学などに東欧史関係で20の研究所やセミナーをもち(主に歴史学部、哲学部)、約100名の学者(うち約3分の1がドクトル)が東欧・南東欧史に従事している(小島修一氏によれば、図書館なども含め100以上の東欧研究施設がある)。連邦政府の資金をもらうほか他の資金源もいろいろ使われており、

私が訪問した研究所はどこでも資金難を訴えていた。学会 Die Deutsche Gesellschaft für Osteuropakunde は約 700 人を擁しているという。いずれにしても今回の報告が文字通り一側面に過ぎぬことは明らかであろう。

1. ロシア史関係

① Friedrich Alexander Universität Erlangen, Nürnberg

① -(i) Institut für Historische Theologie (Theologische Fakultät) の Seminare, Geschichte und Theologie des christlichen Ostens. 8520 Erlangen, Kochstr. 4.

(7) F. v. Lilienfeld. Der athonische Hesychasmus des 14. und 15. Jahrhunderts im Lichte der zeitgenössischen russischen Quellen.

この Lilienfeld 女史が指導しておられるセミナーであるが、この方は東方教会史の権威である。東ドイツから客員教授として西ドイツに招かれ、そのまま西ドイツに亡命してしまわれたのだそうであるが、東側にも知人が多いようで、最近、この東側の知人達も執筆して女史の 65 歳の記念論文集が出版された。この編集にあたったのが下記の Rexheuser 夫妻であるが、とくにその夫人 Ardelheit (Heidi) Rexheuser 女史は、このセミナーの卒業生である。Rexheuser 家に宿泊中、ここを訪ねられた Lilienfeld 女史とも交わりの機会を得た。Lilienfeld 女史が東方教会史関係で、わが国専門家のあいだでも高い評価を得ておられることは、帰国後に教えられた次第である。

(8) 栗生沢猛夫「〈Нестяжатель〉研究とその問題点」『史学雑誌』83-1, 1974。この論文の 44 頁注で、Nil Sorskij 研究として欧米の研究の中で、女史のものは「群をぬいている」と評価されている。

Lilienfeld 女史の指導されるこのセミナーは、ロシア正教関係の豊富な文献をもっている。これは、正教の神学校図書であり、1930 年代に、宗教の抹殺を企図したソ連政府が西側に売り飛ばしてしまったものであるとのことで、その半分がスイスに、残り半分がここ Erlangen にあるという。聖人伝、聖書研究、コンメンタリーなど多岐にわたっており、20 世紀のはじめ頃にまで及んでいる。おそらくは、この豊庫を利用しつつ次のような作品も生れたのであろう。

(9) Ardelheit (Heidi) Rexheuser. Aufklärung und Orthodoxe Tradition, Evgenij Bolchovitinovs Tichon-Biographie. "Festschrift für Fairy von Lilienfeld zum 65. Geburtstag"

18 世紀啓蒙の時代に聖職から俗人にもどり、地域にあって社会福祉的な仕事をしたりしたある人物について、同時代人の手になる伝記を通して検討し、啓蒙主義とロシア正教教会の関係を論じたものである。Ardelheit の夫 Rex Rexheuser 氏も、この記念論文集に投稿しているが、彼は同大学の歴史研究所の出身である。

①-(ii) Philosophische Fakultät 内の Seminar für osteuropäische Geschichte

この指導者は外交史などの Dr. Karl Heinz Ruffmann 教授であり、彼は先掲の Lilienfeld 女史の記念論文集の編者のひとりでもある。

(10) Rex Rexheuser. Kirche und Politik im späten Zarenreich: Der Fall Volhynien.

“Festschrift für Fairy von Lilienfeld zum 65. Geburtstag”

ロシア史でも特にリベラルの動向に深い関心がある Rex 氏は、ここでは西ウクライナの一地方をとりあげ、そこでの 19 世紀末から 20 世紀はじめの政治への正教教会のかかわりをテーマとしている。Volhynien は、第 2 国会以後の反動化していく中でも、農民代表がかなり残っていた地域としてやや特殊なのであるが、これは、ポーランド人敵視と反ユダヤ主義という 1 点で、この地域の教会と農村とが連合したからだ、といった事情が分析されている。Rex 氏は、私と同じく 1977 年度ソ連に長期滞在し¹⁾、帰国後、次のような本格的なロシアの政治学的分析を公刊しているのである。

- (11) Rex Rexheuser. Dumawahlen und lokale Gesellschaft. Studien zur Sozialgeschichte der russischen Rechten vor 1917. 1980. (Beiträge zur Geschichte Osteuropas. B. 12.)

帝政ロシアの国会選挙を地域別に詳細に分析し、西寄りにリベラルが多かったこと、東の方には右翼が多かったことなどを明らかにしている。こうした地域の実証研究は若い世代にも引継がれており、次にあげる Altrichter 氏は、最近、ネップ期のロシア農村社会構造の研究でドクター論文を提出中である。

- (12) Helmut Altrichter. Konstitutionalismus und Imperialismus. Der Reichstag und die deutscherrussischen Beziehungen 1890–1914. 1977. (Erlangen Historische Studien, 1)

このように Erlangen は、ロシア史研究のひとつの重要な拠点である。

② Tübingen Univ. Geschichtswissenschaftliche Fakultät の中に Institut für Osteuropäische Geschichte und Landeskunde があり、1978 年春訪問したときに強い印象を受け今回の正式訪問となった。目下、Dr. Dietrich Geyer 教授が所長である。

- (13) Dietrich Geyer. Kautskys Russisches Dossier. “Quellen und Studien zur Sozialgeschichte” 1980.

- (14) Dietrich Geyer 編 “Wirtschaft und Gesellschaft im vorrevolutionären Rußland” 1975.

Geyer 氏は、「ドイツの東方政策」「1914 年以前の社会民主主義とポリシュヴィズム」などの演習をもっている。この Institut でロシアへの外国資本の研究をしている Bonwetsch 氏と前回訪問の折お会いしたのである。

- (15) Bernd Bonwetsch. Handelspolitik und Industrialisierung zur außenwirtschaftlichen Abhängigkeit Rußlands 1890–1914. (14) に所収。

- (16) Bernd Bonwetsch. Das ausländische Kapital in Rußland. “Jahrbücher für Geschichte osteuropas” 1974. 22–3.

Bonwetsch 氏は、イギリスの O. Crisp, フランスの R. Girault などと並び、西ドイツでロシア外国資本の研究者であるが、彼についてはわが国でも伊藤昌太氏がふれておられる。

- (17) 伊藤昌太「ロシア帝国主義の若干の問題に関する文献について」『ロシア史研究』

1) モスクワ時代のレックスホイゼル氏とその御家族については、中山弘正・直子『ほほえみはひとつ』ヨルダン社、1981 年でふれている。

No. 32. 1980 年。

いうまでもなく伊藤昌太氏には、旧露通貨改革、独露通商対立などに関する多くの論稿があるが（福島大『商学論集』39-4, 41-6, 『西洋史研究』1972.1, 『福大史学』33, 34等々）旧ロシア短期在外資金に関する次の論稿も注目にあたいしよう。

(18) 伊藤昌太「ロシア帝国主義研究の一側面——短期在外資金をめぐる——」『社会科学の方法』15-9（通巻159号）

(15), (16) の Bonwetsch 氏の論文は、「ロシア資本主義の成長にとって、外国資本は単なる追加的要因という以上のものであった。とはいえ、そのことは、ロシアの西欧に対する外交的・経済的従属を意味したわけではない」という主旨であり、妥当な結論と考えられる。

2. ソ連・東欧主に経済関係

現代のソ連・東欧に関する研究所も相当活発で充実している。

③ Bundesinstitut für ostwissenschaftliche und internationale Studien. Köln D-5000
Köln 30 Lindenbornstraße 22

ここは現代のソ連・東欧に関して政治経済にわたりきわめてアクチュアルなテーマでの研究が多くなされており、連邦政府の政策ともきわめて近いようである。現所長の最近の論文を紹介しておこう。

(19) Heinrich Vogel. Die Wirtschaftskrise Polens—ein Dilemma Sowjetischer Hegemonie. "Osteuropa" 1981-12.

(20) Heinrich Vogel. The Politics of East-West Economic Relations Reconsidered: A German View.

私は、日本の中国研究者が、中国からの帰還者などからのヒアリングで、実態に関する大きな収穫をあげていることを知っていたので、西ドイツでは、亡命者の証言といったものが史料として広く用いられているのではないかという予想をもっていた。ところが、この点に関しては、彼らの話はバイアスが大きくて史料価値に乏しく、ほとんど用いられていないとのことであった。亡命者の証言ファイルといったものを期待していた私の予想は裏切られた。日本のソ連研究者は亡命者等と接触する機会がほとんど皆無であるが、西欧はなかり多くの亡命者をかかえているので、その点で研究条件に差があるのではないかと思っていたのである。ただし、史料として正式には用いられないにしても、多くの亡命者がいることは事実でその人々との交流が、社会主義国の実態の種々の側面にわたって研究者にあるリアリズムをもたせる方向に作用していることは当然考えられる。事実、ケルンのこの研究所でも、図書館の主 Stefan Mardak 氏はウクライナからの相当以前の亡命者でありその周辺で働いている人々も、ブルガリア、ポーランドなどからの亡命者であった。マルダク氏の反ロシア人・反ソ感情は非常に強いものであった。折から西ドイツ政局の台風の眼になりつつあった「緑の党」(Die Grünen) についても、あれは赤がやっているのだと強く断言していた。

情報処理の点では、研究所としてはマイコンがすでに文献の整理などに導入されており、

例えば「ソ連」と「農業問題」とリンクすると、関連文献が次々と画面に登場する、といった具合であった。欧米の文献である。

社会科学・科学政策、内政、経済、国際政治のセクションに一応分れており、81年末現在で、研究スタッフは26名、職員55名といった規模である。そして研究所の研究調査面の委員会には、①-(ii)でふれた K. H. Ruffmann, また以下でふれる K. E. Wädekin なども名を連ねている。多忙な Vogel 氏と、ポスト・ブレジネフについて若干話し合ったが（むろんまだブレジネフ存命中）その発言は極めて慎重で、かつ大きな変化を予想しないものであった。文献(5)、(6)は、この研究所のスタッフのものである。

④ Justus-Liebig-Universität Gießen. Zentrum für Kontinentale Agrar-und Wirtschaftsforschung. Otto Behaghel Straße 10/D 6300 Gießen

非常に近代的ビルディングが並び立つこのギーゼンの大学には、西側世界でソ連農業問題専門家として非常に有名なヴェデキン教授がおられる。氏は1980年秋にも訪日しておられお目にかかる機会があったが、今回の訪独のひとつの重要な目的はこの研究所の訪問であった。研究室棟の一部屋が宿泊できるようになっており、ここに泊めていただいた。ヴェデキン氏の研究室には、日本農業についての日本人の英文著作が積んであり、氏はこれを読んでもう一度日本を歩くのだといっておられた。

(21) Karl-Eugen Wädekin. Osteuropas Nahrungswirtschaft Gestern und Morgen. 1982. (1981年6月5—8日, Schloß Ranisch Holzhausen bei Gießen の国際大会の記録)

(22) Karl-Eugen Wädekin. Soviet Agriculture's Dependence on the West. "Foreign Affairs" 1982 spring. (『のびゆく農業』627. (柴崎嘉之氏訳・解題))

(22) は20ページ余の小編とはいえ興味深い論点を含んでおり、少し私なりに内容にもちいっておきたい。

ソ連がアメリカから大量に穀物を買付けるという状況は20年前には考えられなかったことで、1963-64年の大量買付けもあったが、72年以後はじめて、ますます増大する量の規則的購買者として登場している。かつての純輸出国から完全な純輸入国に転じてしまったのである。ソビエトの消費者は飢えているというのは誤解であるが、畜産品やその精製品への需要が急増しているのである。人口増と一人当りの直接の穀類消費量減少を考慮すると穀物の増加分はほとんど飼料に用いられてきたことになる。そしてソビエトの飼料効率はここ20年間ほとんど変化なく、単位生産高当り同じ飼料量で推移した如くである。ところがこれは驚くべきことで、西側では飼料効率は徐々に高まっていたのである。飼料方法の改善などで、例えばアメリカの豚は生肉1ポンドにつき、1960年4.2ポンドの飼料を必要としていたものが、1980年には3.85ポンドに下り、牛肉でもこの間に9.1ポンドから7.1ポンドに下がっているのである。鶏では4ポンドから2ポンドともっと著しい。ところがソ連の飼料効率は第1表の如くであった。

ここで豚肉の場合、ソ連の1:9,1は西側の基準では1:7に近い。そうだとすると、追加100ポンドの豚肉を得るのに西独や日本が350~400ポンドのコーンを輸入せねばならぬのに対し、ソ連は700ポンド必要ということになり、もしソ連が、西側の飼料効率でや

第1表 ソビエト集団農場における飼料効率
(単位生産高当りの飼料, 燕麦換算)

	1962-65年 の平均	1966-70年 の平均	1979年
牛 乳	1.6	1.4	1.5
牛 肉	12.2	11.4	13.1
豚 肉	11.9	9.4	9.1

(22)-p. 885

れば、穀物輸入は大ざっぱに言えば半減しうるのである。

ヴェデキン氏はさし当り4つの事情を掲げて飼料効率の悪さを説明している。

1. ソ連の飼料は蛋白質が少い。
2. 集団農場の畜舎の家屋状況が悪く、寒さのせいで、飼料も肥るよりも体温維持に消費されてしまう。
3. 国営混合飼料工業の供給の不規則性、輸送体系の悪さからくる飼料の質量の変化。
4. 劣種であること。西側で5~6カ月で肉にするところをソ連では8~10カ月、時に1年かかっている。牛でも屠殺時、米国1000~1100ポンドに比し、770ポンド位。

これらに加えてまだ手労働が非常に多く、例えば、アメリカで牛100キロ、豚100キロを増すのに3.1及び1.3時間かかっているとすると、ソ連では55及び39時間と非常に大きな差がある。畜舎の状況という1点では、私もこれは当たっているように見える。大都市近郊などで畜舎の新築は盛んであるけれども、そういう場合でも相当古いものが併せて利用されている場合が多いように思われるのである。

ところで、ヴェデキン氏によれば、ソビエトは、ほとんどコストを無視して農産物生産高の増大をはかってきたのであって、ソビエト農業で成長が達成されてきたという点は何ら驚くべきことではなく、それがより速いものでない点こそ驚かれねばならぬ、という。氏は、1981年の穀類(含豆類)を約165百万トンと推計している。こうした数字をどこから出したのか、何か特別の情報ルートでももっているのか、というのが私の疑問と期待であった。しかし、これは研究所の皆で討論して出した数字だということで、東側の中に何か特殊な情報網をもっているわけではないという。確かにこの研究所には後に紹介するようなしっかりした研究者がいて、ヴェデキン氏の指導の下にひとつのチームを成し、この人々が手分けして、地方定期刊行物まで含めて公表の数字とか情報を追う中からこの推計値はひき出されたのであった。帰国後しばらくしてから、1981年の穀物収穫高はほぼ149百万トンという準公式(であって公式発表は未だにない)数字を知った²⁾。ヴェデキン氏らの推計数字は、少し過大だったわけであるが、それでも氏らは15~16%のロスを含むものとして先の数字を出しているので実質139~140百万トンとなり、かなり正確な推計だったと評価しうるであろう。

ヴェデキン氏は、1979-81年は穀物以外の農産物(これらは生産高が公表されている)も、1976-80年平均に比し落ちこんでいることに注意を喚起している。

気候条件という点ではアメリカよりもむしろカナダが比較対象として近いこと(この点

2) 対談、宮鍋職、中山弘正「ソ連経済は立ち直れるか」『エコノミスト』1982年11月30日号

第2表 冬小麦，春小麦の播種面積（100万ヘクタール）

	1940	1965	1970	1975	1976	1977	1978	1979	1980
冬小麦	14.3	19.8	18.5	19.6	17.3	20.7	23.1	18.7	22.6
春小麦	26.0	50.4	46.7	42.4	42.2	41.3	39.8	39.0	38.9

『ソ連邦国民経済統計・1980年』（露）224頁

第3表 冬小麦，春小麦の単位面積当り収量（ヘクタール当り100キログラム）

	1940	1965	1970	1975	1976	1977	1978	1979	1980
冬小麦	10.1	16.1	22.8	18.7	25.9	25.1	29.8	20.5	22.1
春小麦	6.6	5.5	12.3	7.0	12.4	9.7	13.1	13.3	12.4

『ソ連邦国民経済統計・1980年』（露）231頁

はナウム・ジャスニーも強調したことがある）に注意しつつ、穀物の中では春小麦が多いことを指摘している。春小麦の方が播種面積が倍前後も大きいことは周知のところであろうが、この春小麦は単位面積当り収量は冬小麦よりはるかに低く、かつ不安定なのである。ヘクタール当り1トンに達しなかった年も多いのである。上の2つの表がこのあたりの状況について示している。フルシチョフ農政期のいわゆる処女地開拓は、カザフ・西シベリア地方での春小麦地帯の形成を柱としていたが、1950年代にこうして広がった「辺境」は不安定度もまた大きかったのである。

ヴェデキン氏は投資・労働効率の面も検討し、諸投資がアメリカのヘクタール当り230ドル（1978年）に比し、ソ連は185ドル程度で、まだまだ少い、としている。労働人口という点でソ連の方が明らかに人手過剰であるとしつつも、たとえば綿花47%はまだ手づみであるというように、労働力の過多と過少の併存とまとめている。都市への労働力の流出で、農村は農繁期になると逆に都市からの「援農」を必要とするのが実情なのである。ハバロフスクのトマト畑で、正規のソフホーズ員6人のところに200人市民の援農がなされていたという実情を報じた高田記者の話によるとこうした収穫期には、都会の建設現場は本当に人手不足でただ資材だけごろごろ寝ている状況だという³⁾。ソ連の集団農場全体としても、1970年には1980年のときよりも1.4倍多く外来労働力を受け容れていたが、78年には70年の2.4倍もの人々に依存したといわれており（1979年約1560万人）1960年代に比べると農業就業者減少のテンポは70年代には落ちたとはいえ、季節的不足は相当大規模になっているとみられる⁴⁾。また、未だざつと3分の1の生産力をにっているとみられる個人副業経営については、ようやく近年奨励策に転じたもののそれは25年も遅かった、と結論している。しかし、ヴェデキン氏の総括的結論では、79-80-81年といった連続凶作が、そう続くことはなかろう、例の飼料効率が10%上るだけでも燕麦換算1,000万トンは節約になるといった点が指摘されている。穀物大量輸入は続くと見られており、国際収支の問題は不変で、石油も金も販売価格がむしろ下降する中でこのことはいっそう大変だとしているが、結果は1982年穀物176百万トンにとどまった如くで、81年よりは上昇し

3) 『ソビエト NOW』読売新聞社1983年、114頁。

4) 拙稿「ソ連農業とその対外関係」明治学院大学『経済研究』64号、1982年、66頁。

たとはいえ、79～82年の4年平均173百万トンという低迷ぶりに終わったのであり、現実の結果はヴェデキン氏の推測よりも悪かったといわねばならない。とまれ、氏のこの論文は、荒田洋氏などにもさっそく評価されており⁵⁾、小編ながらこれまでの精進の成果を示しているといえよう。

ヴェデキン氏と協力しつつ東欧諸国の農業問題で業績をあげている研究者にシンケ氏がいる。

(23) Eberhard Schinke. Schlachttier-und Fleischproduktion in Osteuropa. Rumänien. “Giessener Abhandlungen zur Agrar-und Wirtschaftsforschung des Europäischen Ostens” Band 79. (『のびゆく農業』523に高山隆子氏の訳と解題がある)

(24) Eberhard Schinke. Schlachttier-und Fleischproduktion in Osteuropa. DDR. 同上, Band 95.

また他に Dr. Galria Pospelowa 女史なども居られ、高山氏も解題に書いておられるようにソ連・東欧農業関係の研究所として大変充実している。ソ連・東欧の諸定期刊行物類をはじめ西側の定刊・統計なども実によく整備されている。

著者に直接会うことはできなかったが、ヴェデキン氏の弟子で、ソ連の農村社会学者の仕事などを評価しつつ、農村内の位階をも分析したものに次のものがある。

(25) Helmut Liely. Die Rolle der “Mechanisatoren” in der ländlichen Gesellschaft und der Landwirtschaft der Sowjetunion. 1981. Giessen.

⑤ Osteuropa-Institut München

Scheinerstraße 11 D-8000 München 80.

現状分析に非常に熱心で、例えば次のような論文を書いている中堅研究者の2人と、最近のソ連経済をめぐる少し意見交換の折があった。

(26) Herman Clement. Die Wirtschaftliche Entwicklung in RGW in den 70er Jahren. 所内レポート, No. 86. 1982. 4.

(27) Wolfram Schrettl. Das Echo der sowjetischen Mißernten : Agrar-statt Technologie importe. Die sowjetische Wirtschaft 1981/1982. 所内レポート, No. 87. 1982. 5.

これらの論文はいずれもソ連の公表統計数値を基礎としており、それにアメリカなどの推計を考慮しながら (Schrettl 氏は米国留学経験あり) 分析するというもので、やはりソ連側の中に特別の情報網をもっているわけでもなく、かつ亡命者証言が史料とされるわけでもないという (ただし、チェコ人亡命者研究スタッフが居た)。現代ソ連の経済力については、私が少し悲観的側面を強調したためにその反動もあろうかと思うが、かなり楽観的に見ており、外国資本などもほとんど問題にならないという調子であった。実に精力的な研究が続けられており、政財界への情報供給源のひとつと思われた。所長はアルトマン氏であるが外国出張中で会えなかった。

(28) Franz-Lothar Altmann. Wachstumspause oder Krise? Tschechoslowakei 1981/1982. 所内レポート, No. 85. 1982. 3.

以上で西ドイツで訪問した研究所は全部であるが、帰路オーストリアのウィーンで国際

5) 倉持俊一編『単身犬のソ連』有斐閣、1983年、第8章農業(荒田洋稿)242-243頁。

最近の西ドイツのソ連・東欧研究の一側面

比較経済研究所に寄ることができた（佐藤経明氏の紹介による）。

⑥ Wiener Institut für internationale Wirtschaftsvergleiche A-1103 WIEN-POSTFACH 87.

所長レフチク氏は来日もされたしよく知られている。

(29) Friedrich Levčík. Die chinesische Wirtschaft nach der Kulturrevolution. "Wirtschaft und Gesellschaft" 1982-3.

氏はポーランド問題で、「連帯」側と政府側の両方から当事者を呼んでヒアリングをしたということ強調しておられたが、東西両方の情報が公平に入る都市なのであろう。ポストブレジネフについてはほとんど路線変更の余地なし、と見、また西ドイツ「緑の党」については厳しい見方をとっておられた。

研究所での情報処理という点で印象的であったのは、国別テーマ別の大型ファイルが実に多数存在していて、それぞれの中には、新聞記事のコピーの他雑誌論文の第1ページのコピーなどが日付順に挟まれていた点である。これでタイトルや書き出しをざっと見ていてこれかと思うものは全体を読もうというわけである。ひどく情報過剰な時代になっているのだから、なかなか上手な処理方式であると思われた。ファイルは大きな引出し棚に整理されているが、相当大型の棚がひとつ全部エネルギー問題だということであった。

諸研究所についての直接の報告は以上の如くであり、私自身の見聞した範囲は非常に限定されたものではあるが、諸先学の論文、論評などを参考にしつつ一応しめ括っておきたい。

野尻武敏氏は、ドイツ・オーストリアの諸研究所を広く見学された結果として、わが国と比較しつつ研究動向として次の点を掲げておられる、本稿、文献(3)。

- 1) 現実的
- 2) 包括的（「経済の流れを支える社会的・精神的あるいは自然的な構造や基盤の考察にも及ぶ」(3)-29頁）
- 3) 効率的（研究所の専任スタッフは20名を越えぬ小規模のものが多く、それが国内外の関連研究者を集めてプロジェクトを組む。「そのばあい研究所はただオルガナイザーの役割をはたすだけといったことも少なくない。」(3)-30頁、この点(4)-158頁注(67)）
- 4) 国際的（「東西の学問的交流は想像以上であり、流動研究員や研究旅行者の往来も盛んなようである。」(3)-31頁）やはりなんといっても近いのである。

小島修一氏も、「改めて西独の東欧研究の重厚さと組織性との強い印象を受け」((4)-139頁)、西独の東欧研究に関する特徴点として、「現実的な問題関心、研究の制度化とこれを支える書誌学的活動の充実、後継者養成への配慮、対東欧政策との密接な関係」((4)-165頁)を指摘しておられる。私自身の見聞の範囲は狭いが、きわめて類似の感想をもったことを記しておこう。

以上をスラブ研究センターのシンポジウム(1983年1月28・29日)で報告した際に諸先学から貴重なコメントをいただいたが、特に伊東孝之氏から次の諸点の指摘があった。

○私が執ように尋ねて巡った「亡命者の役割」の件は、アカデミズムではじっさいとる

にたらないこと。

- また、私が、予想していたよりも「反共主義」が少なく、きわめて正功法の実証研究が多いと思われる、とした点に関連して、第1にアカデミズムの伝統がしっかりしている点、第2に実利の関心が強く、現実認識がリアリズムとなる点、第3にナチズムへの反省から反共主義への抑制が利いている点、の3点。

訪独中、ちょうどニュルンベルク滞在中、シュミット内閣崩壊のニュースに出会った。折からリベラル研究者のレックス氏〔註(10)、(11)]——彼はロシアのリベラルのみならず現代ドイツのリベラルにも強い関心をもっているのである——宅にあって、氏の興奮を通して西欧政局の曲り角を強く感じた。また、街頭では、「緑」の若者達が沈黙のうちに手をつないで輪をつくり、広場に立つという沈黙のデモ、またカトリック青年達の反核集会などをも目撃し、現代ドイツの状況を思わされた。レックス氏の場合は、私と同じく1930年代生れであるが、彼の大学〔①-ii〕の助手の若い婦人が「自分達は『未来がない』が合言葉です」とクールに語ったのが忘れられない。ドイツのソ連・東欧研究も、長期的には、こうした新世代のようになっていくところへと大きく変わっていくことであろう。

(補記) 本稿作成の途中で、ヴェデキン氏の中国農業についての論文の送付を得た。氏の精力的な学習ぶりがうかがわれる。

- (30) Karl-Eugen Wädekin. Die Organisation der Landwirtschaftlichen Produktion als Vorgabe für ihre Modernisierung. 'China und der Weg der Modernisierungen Probleme und Möglichkeiten der Zusammenarbeit.'

なお諸研究所の近年研究業績一覧は省略した。

(1983年5月)

A Note on Russian-Soviet Studies in West Germany

Hiroma NAKAYAMA

I visited five Institutes of Russian-Soviet studies in West Germany and one in Austria in September 1982. This note is the report of my visit to these Institutes. It is said over 100 such Institutions and Seminars are working in modern West Germany, so my report is very limited.

First two Institutes/in Friedrich Alexander Univ. Erlangen, in Tübingen Univ. Geschichtswissenschaftliche Fakultät/are studying about russian history and have many rare materials. I mentioned about the works of Rex-Rexheuser, A. Rexheuser, H. Altrichter, F. v. Lilienfeld, D. Geyer, whom I met this time and also Bernd Bonwetsch whom I met five years ago and whose works on the problem of capital

import in Russia.

Other four Institutes/Bundesinstitut Köln, Justus-Liebig-Univ. Giessen, Osteuropa-Institut München, Wiener Institut für internationale Wirtschaftvergleiche/touch the studies of modern Soviet Russia. I wrote about a few scholars and about the methods of management of informations in these institutions. Of the scholars, I especially wrote about the works of Karl-Eugen Wädekin, whose studies on modern Soviet agriculture is widely known in the world.

In this trip I wanted to know about the rolls of emigrants in the historical reserch in the West Germeny, because in Japan we have almost no chance to hear from them but in western europe such case may be very abundant. But to the contrary, such hearings are not used as a historical testimony because of its bias.

Prof. NOJIRI, who visited in West Germany in 1975, summarised the characters of russian-soviet studies in West Germany as (1) realistic, (2) comprehensive, (3) efficient, (4) international. I agree with him.

(May 1983)